

# 鎖国なき『対馬藩』銀貨の道

—日韓トンネル中継島からの視点—

高雄 武保\*

## 1. 対馬伝言道コトツケミチに生きる海底トンネル隧道計画

韓国古代史の立場から 邪馬台国論争 を照射すると、帯方郡治 は、ソウル付近では無く、黄海道鳳山付近であり、「郡より倭に到るには…」の出発点は、海州ヨウソンか甕津、ここより、牙山付近まで、江華湾内航行が、魏志東夷伝、倭人の条、最初の水行、牙山湾の上陸地点は、馬韓月支国、長里でなく短里80里を1里と換算すれば、韓土内、水行は2千里、陸行は5千里、「始めて一海を渡る事、千余里、対馬国に到る…」と、里程の数値は「日韓トンネル計画案」にもピッタリ。韓土内水、陸行併用説を雄弁に実証韓半島、陸行の眼が、…一海ハジメテ渡ル…と感動 対馬国 山嶮しく道路は禽鹿の径の如し…と、ケモノ道・イタチ道・潮ヶ道などと、邪馬台国の玄関、対馬島に鮮明なライトがあたり、邪馬台国への道がタイムマシンで甦える。文明を伝達する ミチ、対馬にしかない道 ことづけミチ、に、スポットを当ててみよう。この道は、古代日韓の国際ハイウェイの「原始道標」ではなかろうかと、私は思う。解説してみよう。

「対馬・コトツケ道」孤島の暮らしが、どっぴりと匂う、この言葉は美しい。この道は、対馬のどの部落でも生きている。次の様にして使われる。たとえば、A村からB村に向向いて行く場合、海

\*対馬郷土研究会監査委員

は時化て小船は出せない。その時は湾奥のC点を經由して、岬をぐるりと(コの字)コースで、陸行しなければ行けない時が多い。この時思いついて、伝言を頼みたい人は、対岸を見守っていて、向い側の岬を迂回する人が近づくと、大声で呼び止め、オランダ言ツケヲ頼ム、この様な、道筋(意志を高速で伝導する古代のニューメディア)を対馬の島民は今でも「ことづけミチ」と言っている。巨視的にみると、対馬御崎はA点、巨済島はB点、対馬北端鰐浦C点を經由せず、直結したA—B点ことづけ道は、今世紀、海底電話線ケーブルの回路として、マイクロウェーブ開局迄活躍した。海峡は魔の海鰐浦—釜山の間付近では、潮流が逆になる。従って、潮と風が逆で三角波が立ち巨船も転覆し、多くの人命を飲み込んだ……。何とかして安全に韓半島と日本列島を結ぶ道がないのであろうかと、構想されたのが、知る人のみが知る「対馬中心の内鮮海底トンネル計画」である。発案は大正8年(1919年)。この計画は「対馬日日新聞社」発行の『対馬近代史』が詳しい。一部要点を抜粋させて頂こう。(原文の儘・朝鮮と言う文字を本稿でも使用させて頂くが了承願いたい)

「…先頃関門海峡の海底トンネル認可事業を申請したが、政府事業としてやるので認可は出来ずと拒絶された……今度は、本土朝鮮間海底トンネルを調査中…唐津—老岐—対馬(豆段=豊崎)—釜山……工費見積り二億五千万円、工程日数約三十年、人工浅瀬に換気孔を敷設すれば、難工事で

はあるが、不可能では無い。杉山茂丸氏が、この隧道計画を発表すると、世人は彼を「杉山ホラ丸氏」とニックネームを奉って、海底トンネルは、夢と一笑に付し去った……。だが、対馬日日新聞社長・松尾鉄次氏は、遠からぬ将来に於て或いはこの実現は見はしないか…との希望だけはつないでいる……』と、先見的な表現で論説を結んでいた。時は流れて、敗戦。海峡は、李ライン国境の海峡となった。筆者も、青年時代、海峡に出漁中、朝鮮海峡巨濟島の島影から、動乱の戦火か、煙りが一筋、夕陽を浴びて美しかっただけに、今も尚その印象を忘れ去ることはできない。大正8年は、対馬海底隧道計画と、韓民族三・一独立運動が起きた時、それから65年の歳月が流れた。永い永い冬であった…。しかし日本国を代表する中曾根<sup>チンネ</sup>総理が、初めて訪韓、韓国語でスピーチをしたので異例な程の反響を呼び、強い反日感情も、小さな努力の積み重ねで好転、やがて全斗煥<sup>チョンドホウン</sup>大統領が訪日、やっと「日韓新時代」に入った。大統領閣下は、「過去は筏に流し……」と演説をされたが、両国は、今もなお「近くて遠い国」。日本と韓国は地球がある限り、永遠にお隣りの国でありながら、距離はあまりにもまだまだ遠い…。この隣国間の深い怨念の溝を埋め、ことづけ道が貫通する方法は一にも二にも「コトバ・ことば・言葉」＝「マル・マル・マル」の教科書教育である。一衣帯水の両民族がお互いの国の思考方式や文化を教科書で正しく学ぶ事から友好善隣の道が生まれる。日韓のはざままで、文化の橋わたしをした筏船、(古代舟の原型、対馬佐護湊に実在)の島から教科書の恐しさについてふれてみよう。

## 2. 教科書が抹殺した<sup>イスン</sup>李舜臣將軍、

たとえば、日本人の韓国に対する「無知」の一事例として、李舜臣、三・一運動について論ぜよ、と言う試験問題には、戦中派(大正末期から昭和初期生れ、皇国史観教育を叩き込まれた世代)は、ゼロ点しか取れないのではなかろうか、何故ならば1919年(明治42年)日韓併合を実現した政府は国策上、韓民族の独立思想を高めるものを一切抹消、「創氏改名」まで行ったのだから、日本の教科書から、李舜臣の名もハングルの使用も消されたからに外ならない。大正8年3月1日を期して、

韓半島全土に燎原の火の様にもえあがった韓民族独立万歳三・一の運動など、筆者も戦中派1928年生れの為全く知らなかった。しかし父達明治生れの年寄りには「東郷はネルソンや李舜臣より偉い」と、李舜臣の名を知っていた。韓国で今最も尊敬されている救国の英雄<sup>イ</sup>李舜臣將軍、は本稿と関連が深いので、すこしふれてみよう。

彼は今から440年前の西暦1545年4月28日に生れ、壬辰倭乱(豊臣秀吉文禄の役)の時、李朝の全艦隊を率いて、日本水軍470隻を釜山沖で撃破、加藤清正、小西行長、上陸軍の補給路を断ち、侵攻日本軍を窮地におとし入れた。1597年、彼は無実の罪で処刑されようとするが、慶長の役が起き再び艦隊をひきいて、133隻からなる日本艦隊を撃退、翌年も500隻の日本水軍を撃破したが、この露梁の海戦で銃弾に当たり壮烈なる戦死をとげた。遺蹟は顕忠碑として聖域化されていたが、日韓併合後は祠堂に詣でる事は勿論禁止された事は言うまでもない。大韓民国独立後、忠烈祠は再建、釜山市の中心部に位置する龍頭山公園には見事な<sup>イ</sup>李舜臣將軍像、が建てられ、「太閤が睨みし海の霞かな」の逆に、プンシンスギル豊臣秀吉の国を睨んでいる。高さ118mの白亜の釜山タワーに映える釜山龍頭山公園こそ、日韓再民族が<sup>イ</sup>永久不戦、を誓う聖地としたい…。もっと歩み寄って<sup>パルバン</sup>両氏族の溝を埋め、歩み橋を渡そう…。

『偏った歴史教育から民族の反感と差別が生れ、偏った教科書から英雄が消される』

## 3. 江戸時代鎖国なき倭館・日本人町

シャム(タイ国)に山田長政の日本人町があった事は、誰でも知っているが、日韓の歩み橋を渡した、釜山倭館の日本人町については、殆どの人が知らない。これも鎖国の窓は長崎港だけとして、日本史から江戸時代の友好的な国交記録が、かき消されていたからであり、鎖国なき<sup>イ</sup>対馬藩、の実態が、あまりにも知られなかったからに外ならない。対馬藩主、宗家の菩提寺、万松院文庫に秘蔵されている「毎日記」は約7,000冊、その他の記録を含めて約1万8,000冊、書簡等約20万点。この外、江戸藩邸一養玉院一東大・慶應義塾大学保管、倭館一国会図書館、韓国文教部等に保管されている資料の学術研究が国境を越えた学者

陣の精神によって、新しい日朝中世近世史の実像が、誤りのうろこがはがされて浮びあがって来る。教えを頂いた日韓諸師の名は数多く書きおおせないが、野生号以来の師、金元龍博士、ハングル地名考の指導を今も懇切に頂く李炳銑博士、万松院文庫整理に数年毎夏来島、古文書研究のアプローチをおみちびき下さった泉澄一教授や、田代和生博士に感謝しつつ諸師の論考レポートから引用、私見を加筆して以下、近世日韓の通交貿易史にスポットを当ててみたい。

対馬の上対馬町が友好都市と結ぶ釜山市絶影島(影島区)の対岸は、釜山市街の中心部、「プーサンハンに帰れ」が有名になった釜山港、国際船埠頭。そこから直線で僅か700メートルと近い龍頭山公園。ここを中心として周囲10万坪の広大な敷地こそ、実は、鎖国日本の江戸時代、対馬藩が韓半島に持っていた居住区域、日本人町である。普通租界の借地期限は99年間であるが、釜山倭館はなんと1678年(延宝六年)水戸黄門が50歳の年から1873年(明治6年)明治新政府に接收される迄、約200年間も、この地で、近世日韓の外交・貿易業務が行われ、実質的な日本租界であった。一見幕府が、オランダ人や中国人に対して認可していた、長崎出島・唐人屋敷と似ているが本質は全く異なる。倭館は正規の国交機関、出島は私的な商船、面積も倭館は唐人屋敷(1万坪)の10倍、蘭館(約4千坪)の25倍もあった。この倭館には、館守をはじめ、外交担当をする「裁判」と名がつく外交官、東向寺僧の役目は書記官、貿易実務担当は代官、その他、通詞、目付、医者、鷹匠タカシヨウ、陶工、請負屋(御用商人)、水夫、と言った対馬人が、約500人前後も定住していた。当時、対馬藩の人口は約3万人、対馬人の成人男子20人に1人は海外渡航(釜山倭館)体験を持っていた。対馬人男子4人に1人が朝鮮居留と言う時代もあった。足利将軍の文明七年(1475年)の記録では倭館の浦が三浦(斎浦・塩浦・釜山浦)向化倭人は2,200人と言うのだから眼をみはる。ともあれ、延宝六年の新倭館の敷地は、頭初対馬藩は、東西500間、南北250間の広さを要求したが、削減され、東西350間、南北250間、南辺と東辺が海に面し、港は東面に設置、龍尾山が南風をさえぎり、龍頭山を境に、東館・西館にわかち、東館には館守屋敷(大使館)開市大庁(貿易会所)裁判(外

務庁舎)屋敷東向寺(記録官書僧倭屋)通詞屋、弁才天社・釜山窯場、浜には目付・番所・水夫屋が建てられ、東西78間半、南北122間、浦口34間の船滄に、二つの棧橋が突き出ている。又、西館には西の三大庁(使節団の宿)が整然と建てられ、倭館の北側には送使の応接を行う。宴大庁(李朝大庁)と柔遠館(応接に来た李朝側使者の宿)誠信堂(訳官の住居)客舎(李朝国王への肅拜所)が設けられ、東西六大政庁の工事費を李朝政府が賄い、広い倭館の敷地内には、山あり杜あり町あり、明和8年には虎狩りさえ行われたと言う実に広大な「日本人町」であった。ここで大きな疑問にぶつかる。何故李朝政府は10万坪の広大な韓土を外柵をめぐらし、出入口は2カ所、守門、宴席門だけとし、厳重警備監視したとはいえ、(格子なき牢獄)であっても、広い広い10万坪、こんなに広い天地を対馬藩に貸与し、日本人租界(倭館)を認めたのであろうか。又、何故対馬藩だけが400年に及ぶ長い期間、日朝通交貿易権を一手に収めうる事が出来たのであろうか。それには、日本国と朝鮮国との間で結ばれた国際条約にもとづく…喜吉癸亥条約・天文丁未条約・永正壬申条約・慶長己酉条約・この外この条約締結まで苦闘した日韓の谷間で生きぬいた殿、対馬の歴史、義調義智義成公の苦悩国藩思う重臣高僧、国書書き替えに心血をそそいだ玄蘇、玄方、雨森芳州、松浦霞沼等の学者から名も無き島民にいたるまで、良田なき孤島の飢えの苦しむ宿命に闘った。武装商人団の海賊化一倭寇の歴史は古い。対策に手をやいた高麗李朝政府は懐柔政策を実施した。その第一は、倭人の貿易船が来ると、その都度、命の綱の米、麻布、虎皮、人参などを与え、第二に韓土に移住したいと言う者には、住居、田畑、妻をもめとらせ、降倭、投化倭、向化倭として厚遇、第三にはこの投化倭人に、それぞれ官職衣冠を授けて、李朝政府の役人に登用、受職、辞令書、告身を与えた。国の重文に指定されている、皮古三甫羅(彦三郎)などはその一例であるが、これら受職人は海東諸国記では、対馬に18人、老岐に3人、筑前に5人、計26人もいて、彼等は毎年船を出せば、米・豆、布などを貰っていた。当然見返りがある。村上水軍等の倭人海賊の取締りにあたった。従って「東国輿地勝覧」などには、対馬は韓土慶尚道の一属島、その島が倭賊の巢窟とな

るので、自国の領土の逆賊を討伐したのが、己亥東征（李朝寇応永二十六年1419年）である。227隻の韓軍船と1万7,000の軍団が対馬に来襲いわゆる糠岳の戦である。この終戦処理は、対馬征伐の中心人物、李朝の上王太宗が薨じてから和平交渉は進展、李朝四世の世宗王二十五年、毎年貿易船は50艘を送る事が認められ、年々米豆二百石が歳賜米として宗家に贈られる事が約定された。これが世に言う嘉吉条約である。この約定が結ばれる迄には、実は、李朝太宗より、対馬宗貞盛公へ次の様な和交意志の働きかけがあった。

「…もし能く飄然として悔悟し、捲土来降するならば、即ちそれ都々熊丸（宗貞盛）には、好舜、厚禄を以ってせん……。」

これに対して、対馬宗貞盛公は使者を使わし、礼曹判書を通じて「降」を乞い併せて印信を請い土物を献上したと史書は伝えている。条約後、対馬宗氏は日韓通交貿易を一手に統制できる栄光の時代に入った。李朝から送られた銅印「図書」の制が更に細分化され、書契、文引（吹拳）、勘合、現代的にいうならば、外務省権限、パスポート・ビザ発行迄一切を、対馬藩宗家がにぎったのだから素晴らしい事である。しかしこの貿易権利の対馬藩集中成功も、三浦の倭乱、豊臣秀吉の壬申倭乱で、根こそぎ失ってしまった。その復権の為に対馬藩は、梯七太夫、吉副左近、柚谷彌助智広ほか九烈士を次々と韓土の講和使節として送ったが、皆人柱となって帰らなかったが平和へのミチを人柱を捧げた事から国交回復への糸口がつかめ、その後国書改ザンと言う危険な綱渡りを幾重と重ねて、日韓怨念のはざまを、かけずり廻り藩血をしぼって、「日朝交隣」の捨て石に徹しきったからこそ、徳川家と李王朝との国交が復旧した。

国書では、日本国王は徳川將軍、朝鮮国王と対等であった。東洋民族はお互いに相手を少しでも見下す、中華主義的事大思想が強い。日韓の激突をさける為、対馬藩は「裏方」になり切って、中世慶尚道隷属「朝貢」に近い儀式を行い、日朝間のクッション役を果たした。「李朝、国王肅拜」対馬藩倭館の儀式を紹介しよう。朝鮮国王への恭順を誓う神聖なる儀式である。釜山和館の「国王肅拜所」には「殿牌」と言う国王の象徴がかざられる。これを、屋敷の地面に土下座して頭を地面にこすりつけて拝むのである。ムシロも敷かれてお

らず、国王へ貢上する貢物は使者の前に並べられ、李朝の役人は前面に立って倭人の肅拜を見下す。対馬藩でなければ、とてもこのセレモニーは動まらなかったにちがいない。外交の二重構造、これで釜山倭館の謎が少し解けた。次章では国王へ「封進」した見返りの法定果実について述べてみたい。

#### 4. 幕府から李朝人参代往古銀口ード

国書書き替え事件が発覚しても、日朝国交の大切な裏方役は、対馬藩でなければ動まらなかった。対馬藩の家臣であり乍ら柳川調興は自称將軍家の旗本、藩主に反逆して、藩主へ国書かき替えの罪をなすろうとしたが、そうはいかなかった。宗家外交のキャリアは、四百年、柔よく剛を制すの政策によって、日韓二つの国家を上手にリンクさせる機能を持ち、国際的に強く根がついていた。三代將軍は偉かった。好戦的な「タカ派」、柳川氏を支持する土井利勝や林羅山の宗家批難をなだめたのは、家光公その人であったと言う。伊達政宗も「朝鮮は与国（親密な国）誤って兵を動かせば、何を以て、東照大権現様にまみえるおつもりか…」と宗家の「ハト派」政策を支持したと「海槎録」には記録され、絹の道の終着島から逆に「銀の道」の出発駅となった。銀は朝鮮から中国（明）に流れた。

現在の日本では信じられない事だが、日本は金銀島、16世紀-17世紀は鉱産資源国、京都対馬藩邸から調達して李朝へ輸出された銀は1684年（貞亨元年）から1710年（宝永七年）まで27年間に総計なんと、五万貫、長崎薩琉貿易を遙かに上回っていた。

その倭館での貿易のしくみを述べてみると、官営貿易（封進、公貿易）と私貿易（開市）の二本立、封進は進上宗家から李朝国王へ珍品を献上、後日「回賜」と言う形で返礼の品々が贈られて来る。長崎は「入貿易」の形だが、倭館は「出貿易」一一見香港島並、慶長十四年（1609年）の己酉条約によって歳遣船は17隻、特送船は3隻計20隻の定数が決められたが、繁忙応接に音をあげた李朝側が定例の使者を八送使に分け、使者は外交儀礼専門、貿易品は使者の往来と関係の無い「兼帯の制」が実施され、18世紀の初頭には、年間貿易船は80回程釜山倭館を往復していた。官営貿易と

異って私貿易は、定量でない自由相対方式、前述した「開市大庁」で営まれた。日本側からは、代官が立合い、李朝側は、開市監官、収税官（取引の1割を徴収したと言う）通訳官等が臨席した。開市日は月六回、貿易品が多い時には別の日が特設された。輸出入品の主なものは、米1万石、公木（木綿）660束、大豆300俵、人参35斤。その他が官営貿易品として輸入され、公貿易の輸出は、銅2万斤、錫1万5,000斤。又封進（進上）は、長崎輸入品の再輸出、胡椒4,400斤、明礬<sup>ミョウバン</sup>1万4,400斤。丹木5,600斤など、私貿易の代表的輸出品は銀貨、江戸幕府の銀座、によって鑄造された国内通貨であった。又私貿易の輸入品は、朝鮮人参、中国産生糸・絹織物の3種類、朝鮮経由の生糸は上質の白糸、であった。これが、元禄二年には15万斤、これも長崎貿易を上回ったといわれる。御大様のお通りと言う時代元禄文化の絹のキモノの代価は、江戸の銀座でつくられた銀貨を対馬藩倭館の貿易で求められ、銀は、中国明や東南アジアにまで流れていった。

贅沢の涯、幕府財政は窮迫、銀貨の悪鑄が始まり、正徳元年（1711年）鑄造の四ッ宝銀貨に到っては純度20%と言う悪貨、倭館私貿易は大混乱、

悪貨は良貨を駆逐するグレッシャムの法則がここでも幅をきかした。対馬藩は輸出用だけの純度80%と言う良貨を幕府とかけあって鑄造する事に成功した。これが今、日銀の大金庫に眠る「人参代往古銀貨」である。対馬藩は、悪貨（国内流通の四ッ宝銀）を、良貨「人参代往古銀」と同等対価で交換、倭館貿易に使用、品位差損は幕府の負担で埋められた。この人参代往古銀鑄造をめぐる、新井白石と対馬藩の雨森芳州との間に華々しい経済論争があった。制約、銅輸出への転換等幾多の曲折をへて、いぶし銀の光の道は、明治新政府になってぶつりと切れた……。

## 5. 島伝う日韓トンネル21世紀への道

新羅仏を安産の神とまつり、畿内系貞観仏を蕃神と見なし、高麗仏を村の菩提寺御本尊様と手を合せる対馬の入江の村には仏の道<sup>ロード シルバーロード</sup>が銀の道に継がれた様に、「時間と空間の次元には見えざる手に導かれる世紀の因果律がある。」と思う…不幸のどん底でも未来を信ずる心の喜びがあった江戸時代の人々の様に、21世紀日韓トンネル成功の「因果律」を私も信じて、大いなる結晶を祈りたい。

## 東西文化交流の必要（その1）

文化は孤立して發達し得るものではない。所を異にし人を異にして發達せる數個の異質の文化が相競ひ相刺戟し、相交流し相吸収し相融合して始めて茲に圓滿なる發達を遂げるのである。

外部よりの刺戟を缺いた孤立せる文化は夫れが如何に高度に達したものであらうとも必ずや衰亡の運命を持つ。インカ文明は其の適例である。所謂敵國外患無きところ國常に亡ぶと云ふたのは蓋し此の謂ひか。

遠く世界文化の淵源を尋ぬるに、其處に四つの發祥地を發見する。第一はナイル河の流域であり、第二はチグリス、ユウフラテス兩河の流域、第三は黄河の流域、第四はインダス河の流域である。第一は埃及文明であり、第二はバビロン、アッシリヤの文明であり、第三は支那文明であり、第四は印度文明である。

埃及文化とバビロニア文化とは相競ひ相吸収して發達



し、合流し、東に流れたるものは即ちイラン文化を形成し西に流れたるものはフィニキア文明を起した。フィニキア文明は更に西流して一面カルタゴ文明となり、他面ギリシャ初期の文明に影響した。ギリシャ初期の文明はイラン文化の刺戟によって大發展を遂げたのであった。

ローマの文明は、ギリシャ文明の吸収とカルタゴ文明の刺戟とによつて其の爛熟期に入った。而して今日に於けるヨーロッパ文明の根幹を爲すものこそ實にギリシャ、ローマの文明である。

インダス河の畔に發達した印度文明の内、直ちに東に流れたものは途中云ふ可き程の文化に突き當らず、何等の刺戟を受けず、爲めに大いなる發達の機會を得ずして南洋諸島の間に停滞し、或は蒸發霧散して終つたのである。

湯本昇著『中央アジア横斷鐵道建設論』

昭和14年10月東亞交通社發行より